



Title	現代スウェーデン語における限定修飾語としての形容詞最上級
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	IDUN. 1988, 8, p. 55-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95842
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代スウェーデン語における 限定修飾語としての形容詞最上級

菅 原 邦 城

1. 序

(1) Han är *äldre* än hon. <彼は彼女よりも年上だ>

(2) Han är en *äldre* herre. <彼は(かなり)年配の紳士だ>

の両文における形容詞 *gammal* ('old') の比較級 *äldre* の表わす意味はけっして同一ではない。つまり、(1)のそれは、主語の男性がある女性との比較において後者よりも年上であることを示すが、その男性は必ずしも老人であるとは限らない(たとえば彼が2才で、彼女が1才の幼児であってもよい)。一方、(2)の場合では、比較はとくに前提されず、ただ主語の男性が老人といわないまでも中年といえるほどには齢をとっていることを表わす。現代スウェーデン語文法において(1)のように用いられた比較級を「相対比較級」(*relativ komparativ*)、(2)のようなものを「絶対比較級」(*absolut komparativ*)と称している(Thorell: § 210 参照)。

上述2種の比較級の用法はデンマーク語など他の言語にも認められるが、スウェーデン語ではさらに同様の用法が最上級についても指摘されている。そして最上級は限定修飾語として用いられる場合、呼応する名詞の形態的な実現の仕方にも影響すると考えられている(Wessén: 40 参照)。

本稿において筆者は、目下の関心事である外国語としてのスウェーデン語教育の実際的な見地から、とりわけ限定修飾語として用いられる形容詞最上級の用法に関する学説について検討を加え、それから自身の

観察に基づいて問題の語法の現状をまとめてみる。

2. 形容詞最上級

2.1. 相対最上級と絶対最上級

(3) Gamla vänner är *bästa* vänner. <古い友こそ最良の友>

(4) Ni var *bästa* vänner. (Gripe:51)

<あなたたちは大の仲良しだったわ>

(3)は諺として使われる事実から、新旧さまざまな友人間の比較をした後の一般的な結論を述べていると判断される。他方(4)は、母親が娘にむかって、もっぱら娘と級友の少女との間柄を語っている会話文の一部である。この2文は各々、次のように言い換えることができる。

(5) Gamla vänner är *de bästa (vännerna)/bäst av alla*.

<古い友だちは友人たちみんなの中で最良(の友人)だ>

(6) Ni var *mycket goda vänner* (med varandra).

<あなたたちはとってもいい友だち(同士)だったわ>

(5)のように、比較されるべき2個以上の対象の間で、形容詞の表わす特性・性状について最高の程度・度合を表現するために用いられる最上級は、相対最上級 (relativ superlativ) と呼ばれる。これに対して、ただ強意(ときに誇張)を表わすために用いられる最上級は、絶対最上級 (absolut superlativ) と呼ばれる。

2.2. 相対最上級と絶対最上級の意味的・文法的相違

相対最上級と絶対最上級の間の意味的な相違について、たとえばスウェーデンの大学教科書 (Thorell: § 211) では次のように説明されている。

「(a) *De bästa vännerna är de som . . .*

<最良の友とは...者たちだ>

(b) *vi är de bästa vänner i världen*.

<私たちは世界で一番の友だちです>.

例文(a)において最上級は相対的な意味を有する。すなわち、[形容詞の表わす] 特性が或るグループ内で最高程度にあることを示す。それに対し、例文(b)において最上級は絶対的な意味を有する。すなわち、特性が考えられ得る最高程度（非常に高い程度）にあることを表わす。つまり、いかなる比較も意図されていないのである。絶対最上級はしばしば誇張（hyperbole）を表示する。」

さらに、相対最上級と絶対最上級の間の相違として、意味以外に文法上の相違も挙げられている。つまり、「名詞は、絶対最上級に後続するとき、ほとんど常に後置冠詞のない未知形をとる。」（Wessén：40）。事実上同じ指摘が、Lindholm：71 によってもなされている。

たしかに、例文(4)や Thorell 説明中の例文(b)の ‘vänner’ は未知形のままである。

（なお、蛇足ながら北ゲルマン諸語の後置冠詞とは、たとえば英語 ‘the book, the friends’ に相当するスウェーデン語 ‘boken, vännerna’ に認められる -en, -na などのような前接辞的要素をいう。この前接辞の付いた名詞の形は既知形または限定形、付いていない名詞の形は未知形または不定形と呼ばれる。）

3. 形容詞最上級の用例

3.1. 修飾語としての最上級の統語論的タイプ

§ 2.2 で紹介したスウェーデン人学者の説は、はたして現代スウェーデン語において普遍妥当性を有するであろうか。それに関する結論を出す前にまず具体的に、〈冠詞＋形容詞最上級限定形＋名詞〉のさまざまな組合せを本節で分類・例示する。

（以下において「形容詞」とは、限定を表わす形態素 -a/-e に終わる「形容詞最上級限定形」のこととする。イタリック部分は問題になる組合せを示す。）

(i) 独立定冠詞＋形容詞＋名詞既知形：

- (7) Min far var *den starkaste mannen* i hela Blekinge.
(Nilsson: 5) <ぼくの父さんはブレーキング中でいちばん強い男だったんだ>
- (8) *Den största förändringen* som skett på slottet var säkert detta. (Gripe: 112) <城で起こった最大の変化は、まちがいなくこのことでした>

(ii) 独立定冠詞＋形容詞＋名詞未知形：

- (9) Ja, min far var *den starkaste man*. (Nilsson: 9)
<そうだ、ぼくの父さんとはとても強い男だったんだ>
- (10) Pompe betedde sig som om det varit *den självklaraste sak* i världen. (Gripe: 154) <P は、それがまるでこの世ではごく当然のことのようによふるまった>

(iii) 不定冠詞＋形容詞＋名詞未知形：

- (11) Léonie hade en dröm eller *en högsta önskan*.
(Gripe: 107)
<L は夢、つまりとても大きな望みをもっていました>

(iv) ゼロ冠詞＋形容詞＋名詞未知形：

- (12) Men det var flera mil till *närmaste telegraf*. (Gripe: 69) <でも、いちばん近くの電報局までは数十キロもありました>
- (13) De var dessutom *bästa väninnor*. (Gripe: 120)
<彼女たちはそのうえ、大の仲良しでした>
- (14) Men Ingeborg tog konfirmationen på *djupaste allvar*.
(Gripe: 16)
<ですが、I はこの堅信礼をととても真剣に考えていました>

(15) Skoglund var dum i *största allmänhet*. (Svedelid : 43)

〈S はがいして愚かだった〉

(v) ゼロ冠詞＋形容詞＋名詞既知形：

(16) Sitsen var nött framtill. På *yttersta kanten*. (Gripe :

173) 〈椅子の座部は、前の方がすりきれていました。一番へりのところが〉

(17) Mamma suckade och tog med *yttersta nypan* av fingret i hans tröjkrage. (Svedelid : 97)

〈お母さんはため息をつきながら、息子のセーターのえりをほんの指さきでつまんだ〉

(18) Det var litet i *käckaste laget* att vara jag. (Gripe : 31)

〈わたしにしては少し思いきりがよすぎました〉

(vi) 独立定冠詞＋形容詞＋ゼロ名詞：

(19) Wolfgang var *den äldste* av bröderna. (Gripe : 35)

〈Wは兄弟(2人)のなかで年上の方でした〉

(20) Jag som var *den minste* och *den räddaste* kände alls

ingen oro. (Nilsson : 39) 〈いちばんチビで、いちばん恐がりやだったほくできえ、まったく不安を感じなかった〉

(21) *Det enklaste* var att rymma från alltihop. (Gripe : 86)

〈いちばん簡単なことは、あらゆるものから逃げ出すことだった〉

(22) Nu tänkte hon åka dit. Med *det snaraste*. (Gripe : 164)

〈彼女はそこへいこうと考えました。できるだけ早くです〉

(23) Människornas motiv är för *det mesta* tvivelaktiga, orena.

(Gripe : 16) 〈人間の動機なんていうものは大部分あやしいものよ、純粋じゃないわ〉

3.2. 最上級の用法の分析

前節では、限定修飾語として使用される例を形態・統語論的な基準で分類を試みた。本節においてはそれらの例の文意を吟味して用法を検討することにする。なお、前節で各文に付した訳は、それぞれの文が現われた文脈にしたがって自然と思われるものである。

(i) <独立定冠詞+形容詞+名詞既知形>型：

例文(7)は、主人公の少年が作品冒頭の第1行で回顧する、今はなき父のことである。そして念を押すかのように、再び10行ほど下で、幼い頃にその父に次の質問をした少年の記憶も語られる。

(24) - Är du den starkaste mannen i världen? (Nilsson:5)

く「お父さんは世界中でいちばん強い男なの？」>

主人公が自己の置かれた逆境の中で、この強い父親を最上の男の理想像としてつねに精神的な支えとすることは、読者が終始意識させられる作品の底流である。

一方、(8)は、主人公の仲良しである友人兄妹の住む城を訪ねた主人公が抱いた感想である。その兄妹2人の父は、外国の軍隊に勤務して長年スウェーデンの居城を留守にして死んだも同然で、壁に掛かった肖像画、おぼろげな記憶、神話のごとき存在であった。しかし、その子供たちがバリーで父親と再会を果たして帰国した今は、たとえその身は外国にあっても、父は子供たちにとって常にもっとも身近に意識される重要な人物となっている。これを、主人公は最大の変化と感じたわけである。

こうして両文は文脈から、他の男たちとの比較あるいは以前の機会との比較が意図された、相対的な意味(<もっとも～>)を表わすと言える。同じ最上級の用法は、次の文にも認められる。

(25) I vintras hade det hänt henne något så besynnerligt.

Det var under *den mörkaste tiden*, någon av dagarna före jul. (Gripe:148) <このまえの冬、彼女にはとても妙な

ことが起こりました。あれは一年でいちばん暗い時期の間、
つまりクリスマス前のある一日のことでした>

この型による表現は統語論的には、定説どおり最上級の相対的用法と言える。周知のように、これがスウェーデン語でもっともノーマルな限定名詞句の型、すなわち、<限定する定冠詞+限定された形容詞+限定された名詞>である。

(ii) <独立定冠詞+形容詞+名詞未知形>型：

例文(9)の直前で語られているところによると、主人公の母親は非常な美貌の持ち主で、そのために、教会で彼女の結婚式を執り行なった牧師でさえ式辞をすらすらと読むことができずに、いつもの3倍も手間取ったほどであった。そして、(9)の直後に次の文が続く。

(26) Min mor var *den vackraste kvinna*. (Nilsson : 9)

<お母さんはとっても美しい女性だったんだ>

これと同じ用法と考えられるものが、手紙を締めくくる定型句

(27) med *de bästa hälsningar*

<敬具> (文字どおりには、<最上の挨拶を添えて>)

にも認められる。

以上の用例から、Wessén や Lindholm が言うように、後置冠詞の付かない未知形名詞に先行する限定修飾語の形容詞最上級は <非常に・きわめて~> の強意を表わして絶対的に用いられていると確認できる (なお、Thorell : § 186, (b) も参照)。

(iii) <不定冠詞+形容詞+名詞未知形>型：

例文(11)を、前後の部分を含めて示せば、次のようになる。

(28) Efteråt berättade Carolin om henne, och jag fick veta
att Léonie hade en dröm eller en högsta önskan att en
gång i livet få hitta ett hemligt fack. (Gripe : 107)

〈あとでCが彼女について話してくれて、わたしはLが夢をもっているのを知ったのです。つまり、それは、生きているうちにいつか隠し引出しを見つけてみたいというとても大きな望みでした〉

ここでは、比較の対象として考えられるものが具体的にはないことに、疑いはない。ところで、この型には(28)以外に用例を得ることができなかった。したがって、十分に普及している独自のタイプと見なすべきか、筆者には確信がない(ある母語話者によれば、きわめて稀な表現だという)。ついでながら、機能の点で不定冠詞によく似た不定代名詞を含む例文を示しておく。

(29) *Någon bästa vän* hade jag aldrig haft. (Gripe: 13)

〈親友というものは、わたしには全然いませんでした〉

ここでも最上級は、〈大の仲良し〉のような意味で絶対的に用いられている。現代スウェーデン語の不定冠詞には複数形は存在しないから、名詞が複数である場合、呼応する不定冠詞は出現しない(つまり、ゼロ不定冠詞である)。これと関連して例文(13)を参照せよ。

(iv) 〈ゼロ冠詞+形容詞+名詞未知形〉型:

ここで「ゼロ～」と呼ぶ文要素は、実際の言語表現において表層に現われないものである。したがって、ゼロ冠詞とは不定冠詞あるいは定冠詞のいずれもないことを意味する。

例文(12)は、作品のもっとも重要な人物 Carolin が主人公と約束した汽車ではなくてその次の便で深夜に到着して、後者から、それならば電報ぐらいは打てたでしょうにと、非難される場面に見られる地の文である。正確に理解するために、例文の前後の部分を含めて訳す。〈たしかに、彼女はそのことを考えもしました。でも、いちばん近くの電報局までは数十キロもありました。そして(彼女が途中下車した荒野の中の)駅では、助けてもらうことはできませんでした〉。この文脈から、

その電報局が、ひとっこ一人いない駅からいちばん近い局であることが明らかになる。また、問題の名詞句が例文(11)の句のように不定冠詞の付いた “en närmaste telegraf” とはなりえないことに、注意すべきであろう。

ところで、例文(12)に酷似した用例が、われわれ外国人学習者が日常的に利用しているスウェーデン・英語辞書 (Santesson et al.) に見出される。

(30) två mil till *närmaste* stad

〈もっとも近い市まで20キロ〉

また、スウェーデンの国語辞書の1つ (Östergren) にも

(31) Ro skall man först till *närmaste* näs.

〈まずいちばん近くの岬に舟を漕ぎつけるべきだ〉

の例文が収められている。

ところで、Thorell: § 187 の説明によれば、この型の修飾語はしばしば形容詞最上級や序数詞であるという。そして、彼が挙げている例文にもまた、問題の形容詞最上級が含まれているのである。

(32) *närmaste* hållplats 〈もっとも近い停留所〉

筆者の考え方が正しければ、この形容詞はこの型に典型的な例と見なされているようだ。意味について *närmaste* は、*nästa/e* 〈次の〉とまったく同一としてよい。そして後者は、たとえば

(33) vid *nästa* station (Santesson et al.: 523 a) 〈次の駅で〉

のように、原則として独立定冠詞を伴わず、また修飾する名詞を未知形にして用いられる。この語法が類推によって、*närmaste* でも行なわれるようになったと考えられる。(ちなみに、*nästa/e* は語源的には形容詞 *nära* 〈近い〉の最上級であり、ここで問題になっている最上級と同じ起源になっている。英語 ‘near, nearest; next’ など他のゲルマン語と比較せよ。)

次に、例文(13)について語られている内容は、§ 2.1 で(6)と言い換え

た絶対的用法の例文(4)と同様のことである。つまり、2人の婦人は親戚であるだけでなく、とても仲のいい間柄だともいうのである。この名詞句に不定冠詞が付かないのは、さきに例文(29)との関連で述べたように、スウェーデン語には不定冠詞・複数が存在しないことによるのである。

例文(14)で問題の名詞句は文字どおり訳すならば、〈最深の真剣さ〉となるが、実際は“på allvar”〈本気で、まじめに〉、あるいは“ta . . . på allvar”〈. . .を真剣に考える〉という副詞的に機能する成句、熟語の一部を成しているのである。

再び前述の Thorell: § 187 に戻ってその説明を続けて見ると、問題となる形容詞最上級はとりわけ絶対最上級であり、挙げられた例もわれわれの例文と同種の副詞句となっている。すなわち、

(34) med största nöje 〈大いなる喜びをもって、欣快の至り〉

(35) i djupaste förtroende 〈非常に深く信頼して、極秘に〉

この同種の表現からみて、例文(14)の最上級が絶対的に用いられていると判断してよからう。また、原級あるいは最上級による“på fullt/riktigt/fullaste allvar”という強意の類語表現が存在することも、この判断を補強しよう。(これらの原級そのものは本来、その語が意味する内容を最高程度に表わしているとも言える。) 実際作品の中で語られているのは、並みはずれて信仰心の強い少女の堅信礼に対する真剣な態度なのである。

例文(15)にも、(14)と同じく副詞句“i största allmänhet”が含まれている。そして、この副詞の機能をになう前置詞句はきわめて多いのが事実である。たとえば“i minsta detalj”〈詳細に〉、“på minsta vis”〈少しも. . . (ない)〉(否定語とともに)、“i allra högsta grad”〈極度に、非常に〉、“med största försiktighet”〈細心の注意を払いながら〉、“i största hemlighet”〈極秘のうちに〉、“önska av fullaste hjärta”〈心底から望む〉。

以上のような前置詞句が冠詞を伴わないことは、それが副詞となることの条件かもしれない。ちなみに、姉妹語のデンマーク語は、定冠詞による限定法についてスウェーデン語と完全に一致するものではない（独立定冠詞と名詞既知形とによる二重限定法はない）が、問題の型に関して、とくに副詞的な用法で限定辞がしばしば省略され得ることが指摘されている（Diderichsen: § 45, Tillæg 2 参照）。この指摘は、ここで扱っているスウェーデン語にも妥当すると言ってよからう。

（v）〈ゼロ冠詞＋形容詞＋名詞既知形〉型：

ここに分類した例文(16),(17),(18)は、その訳文から分かるように、文意を基準にして、(16)が相対最上級、(17)と(18)が絶対最上級を含んでいると判断されている。

(16)は、城の客間で長年にわたって多数の客がすりきらしした椅子を見て、主人公が改めて抱いた思いである。どの椅子もすりきれているが、とくに脚が当たる前端部分のすりきれ方がはなはだしいのである。

(17)が描写するのは、家庭の居間における1シーンである。探偵ごっこに夢中な少年が、居合わせた放火現場で消火に大活躍したあと大いに満足して、しかし夕方おそくに帰宅する。そして母親に、煤だらけの上着のことでお目玉を食らう。つまむのに指(fingret)を使うのは暗黙のうちに了解されるしごく当然のことであって、問題の名詞句によっては読者に、指のどの部分を使ってか——母親の感情を強く反映して、触れるのも嫌だというように指先のさきの先で——が、知らされているのである。つまり、形容詞と名詞は全体ではじめて、いわば1個の概念を表わし、これが、作者が読者に与える重要な情報なのである。

(18)の名詞句を構成する名詞 lag は本来、ものごとを整える様・仕方、その整えられた様・状態を意味するが、ここでの関連でみると、われわれは目下の例に類する一連の熟語の存在に気づく。つまり、“i längsta (kortaste, knappaste, största, minsta, senaste, tidigaste)

laget”〈どちらかといえば少し長すぎる（短すぎる，乏しすぎる，大きすぎる，小さすぎる，遅すぎる，早すぎる）〉。この副詞句の小グループは，そこに含まれる形容詞が表わす特性の度合が若干強すぎることを示すと考えられる。例文が現われている文脈は，控え目な性格の少女の主人公が年輩の夫婦に宛てて，已むをえず手紙を書いているが，無沙汰を詫び，不順な天候や学校，弟妹のことを知らせ，その後いよいよ，弱気になりそうな心を励まして微妙な本題に入ろうとするところである。

(vi) 〈独立定冠詞＋形容詞＋ゼロ名詞〉型：

この型に分類した例文はさらに2個の下位区分ができる。

まず例文の(19),(20)から成る第1グループは，ゼロ名詞の再現が容易である。つまり，ここで名詞は重複するために，あるいは文脈上から，ことさら用いる必要がないのである。

いま例文(19)において，ゼロ名詞をあえて補うと，

(36) Wolfgang var den äldste *brödern* av bröderna.

となり，〈兄，弟〉を意味する語が相前後して現われて，冗長さは一目瞭然である。一方，例文(20)は上例のように単純な重複ではないが，定冠詞共性単数 *den* と，これに続く限定修飾語 *minste* の単数男性形態素 *-e* から，人間の男性を意味する特定の名詞の挿入が容易になされる。すなわち，

(37) Jag som var den minste *pojken* och den räddaste

pojken kände alls ingen oro. 〈いちばん小さい少年で

いちばん恐がっている少年であったべくでさえ……〉

以上をまとめれば，このグループにおける最上級の用法は事実上(i)の型と同一で，相対的用法である。この結論を，兄弟2人に言及する(19)に当てはめることに異論はなかろう。(20)については少し説明がいる。主人公はすでに他のどの少年よりも弱いと語られており，ここで彼が不安を感じなかったのは，ひとえに父親から与えられた名剣のおかげ

なのであった。

この2例に対して、例文(21),(22),(23)から成る第2グループでは、ゼロ名詞の顕現化がきわめて困難、あるいは不可能である。

例文(21)のゼロ名詞は、訳文からも推測できるように、日本語の〈コト、モノ〉という形式名詞に相当するようである。そこで言い換えを試みるならば、1個の名詞で換えることはむずかしいが、関係代名詞を用いて次のような文は作れよう。

(38) *Vad som var enklast* var att rymma från alltihop.

例文(22),(23)の問題になっている名詞句は直前の前置詞に支配されて1個の副詞句を成す。つまり、“med det snaraste”は“så snart som möjligt”〈できるだけ早く〉とほぼ同義、“för det mesta”は“i allmänhet”〈がいして〉(例文(15)参照)と同義である。こうして、そこに含まれる最上級の用法は強意を表わす絶対的用法である。この前置詞ではじまる副詞句は、目的語を支配するという前置詞の性質のために、定冠詞・中性単数を付して形容詞を名詞化しているわけで、さもないと非文法的になる。ちなみに *det snaraste* のような語法は、〈定冠詞中性単数+形容詞〉の語法(例 ‘*det goda*’ 〈善〉)と比較されよう。

4. まとめ

前章において、名詞を修飾する形容詞最上級の統語論的実現の仕方をいくつかの型に分けた。ここでは、§3.2で行なった分析にしたがって、修飾語として働く最上級の意味と関連して分類を試みることにする。

§3.2の分析から、修飾語としての最上級が絶対的に用いられていると判断された型は、(ii)と(iii)、そして部分的には(iv),(v),(vi)である。残る型(i)と、部分的には(iv),(v),(vi)において最上級は相対的

に用いられていると判断された。これを見やすく表にすると、次のようになる。

	型	(i) 定冠詞 + 形容詞 + 既知形	(ii) 定冠詞 + 形容詞 + 未知形	(iii) 不定冠詞 + 形容詞 + 未知形	(iv) ゼロ冠詞 + 形容詞 + 未知形	(v) ゼロ冠詞 + 形容詞 + 既知形	(vi) 定冠詞 + 形容詞 + ゼロ
用法	相 対 的	+			+	+	+
	絶 対 的		+	+	+	+	+

(注) 既知形＝名詞既知形，未知形＝名詞未知形，ゼロ＝ゼロ名詞

この表にしたがって以下では、本稿で第2の目的とする語法の現状を要約して、今回のまとめとしたい。

表から明らかなように、各型に独立冠詞が含まれる(i)から(iii)までは、形態・統語論的型と意味との相関関係はそれぞれ一義的である。

つまり、(i)が表わすいわゆる二重限定形において、形容詞最上級はもっぱら相対的に用いられて、〈もっとも～〉を意味する。

これに対して、(ii)と(iii)の両型では、独立冠詞についてこそ定冠詞あるいは不定冠詞という相違はあるものの、名詞はどちらの場合も未知形(+ゼロ後置冠詞)である。そして、両型とも強意(ときには誇張)を表現するのに用いられる。なお、型(iii)が一般的な語法かどうかは疑わしい(§3.2(iii)参照)。

以上のように、最初の2型は、すでに定説となっているもの(§2.2参照)を裏付けている。

ところで、ここで筆者が(iv),(v),(vi)の3種の型に分類した語法については、従来明確な説が唱えられていなかった。さらにこの3型においては、少なくとも本稿の分析が示すかぎりでは、形容詞最上級が

相対的にも絶対的にも用いられるのである。

最初に(iv)であるが、文中での機能を基準にして名詞となる場合と副詞となる場合のあることが明らかにされた。名詞として機能するものについてはさらに、意味に関する結合程度の粗密がなんらかの関わりを有していると考えられる。つまり、例文(12)のように、現代の言語感覚においてたとえ序数詞的用法に移行したと意識されるまでに本来の相対性が弱まってしまったとしても、他者との比較が前提される表現では、相対的用法が問題になっているのである。これに対して、例文(13)の名詞句〈大の仲良し=親友〉のように、いわば1種の合成語とも見なしうるほど形容詞と名詞が意味上つよく結びついた表現に現われる最上級は、絶対的に用いられている。同様に絶対的用法が認められるのは、前置詞に支配されて、全体で副詞として働く名詞句を構成する最上級である。

次に、(v)における最上級の用法の相違を来たすのは、名詞句が新しく提供する情報がその句のどの部分に含まれているか、ということにあると考えられる。つまり、新情報が形容詞のみによって与えられるならば、その最上級は相対的に用いられている。しかし、名詞句全体で新情報を示すときは、形容詞最上級は絶対的に用いられて強意を表わすのである。

最後の(vi)についてであるが、ゼロ名詞が容易に再現できる句を構成する最上級は相対最上級であり、(i)に等しくなる。反対に、ゼロ名詞の再現が事実上できない句では、最上級は絶対的に用いられている。この両者が表わす意味の間にはしばしば、前者は具象的な、後者は抽象的な概念を示すという対照性も、考えられる。さらに、(vi)の第2種は、(v)の例文(18)などと共通する性格をもっているかもしれない。

最後に以上6種の型を、独立冠詞の有無を基準にして分類するならば、(1)独立冠詞を有する型と(2)独立冠詞を有しない型に分類できる。さらに、前者は冠詞が定冠詞(1-a)であるか、不定冠詞(1-b)であるかで2種に分けられる。後者についても、一般的な現代スウェーデン語の文法意識に基づいて言えば、潜在する独立定冠詞の省略(2-a: 例文

(12), (16), (17), (18)) の場合と, 冠詞を取り得ない場合 (2-b: 例文 (14), (15)) の 2 種に分けられる. これをまとめると以下のようになる.

(1-a): 型 (i), (ii), (vi)

(1-b): 型 (iii)

(2-a): 型 (iv)の一部, (v).

(2-b): 型 (iv)の一部.

この分類が, 関連する名詞の特質と深く関わっていることは, ほほ疑いのないところである. (1988-06-04)

Om den attributiva superlativen i bestämd form i nusvenskan

Sugawara, Kunishiro

Sammanfattning

Denna uppsats syftar i första hand till att diskutera hur man i dagens svenska använder adjektivets superlativ i bestämd form före ett substantiv; om det finns någon överensstämmelse mellan form och betydelse av substantivfrasen i fråga. Materialet har hämtats ur de sista årens ungdomslitteratur.

Som bekant, har superlativen liksom komparativen relativ och absolut betydelse. Den relativt använda superlativen anger att egenskapen finns i den högsta graden inom en viss grupp, däremot betecknar superlativen i absolut betydelse att egenskapen finns i högsta tänkbara grad (= i en mycket hög grad); någon jämförelse

är det inte fråga om (Thorell : § 211).

Beträffande typerna av de substantivfraser som består av fristående artikel ($\pm$) och superlativ i bestämd form och bestämt/obestämt substantiv ($\pm$), har materialet visat att det finns sex olika typer: (i) best. fristående artikel + superlativ i best. f. + substantiv med slutartikel, (ii) best. fristående artikel + superlativ i best. f. + substantiv utan slutartikel, (iii) obest. artikel + superlativ i best. f. + substantiv utan slutartikel, (iv) (utan fristående artikel +) superlativ i best. f. + substantiv utan slutartikel, (v) (utan best. fristående artikel +) superlativ i best. f. + substantiv med slutartikel och (vi) best. fristående artikel + superlativ i best. f. (+ utan substantiv med slutartikel).

I de första två typerna har vi, som redan visats, en relativ (ex (7)) respektive en absolut superlativ (ex (9)). Hos typ (iii), som tycks förf. vara för sällan förekommande att bilda en självständig typ för sig, har superlativen absolut betydelse (se ex (11)). Läget för de övriga typerna är emellertid inte så enhetligt. Den attributiva superlativen i dem kan vara både relativ och absolut. Fraserna av typ (iv) kan funktionsmässigt delas in i nominala (exx (12) och (13)) och adverbiala (exx (14) och (15)). Superlativena i de nominala fraserna kan användas antingen relativt (se ex (12)) eller absolut (se ex (13)). Den substantivfras, som innehåller denna absoluta superlativ, bildar ett enhetligt begrepp eller en betydelseenhet. Den sista gruppen består i själva verket av en preposition och en substantivfras och används alltid adverbialt och absolut. Om superlativen i typ (v) har relativ eller absolut betydelse beror på kontexten. Typ (vi) saknar ett substantiv, som följer strax på superlativen. I de fall, där ett underförstått substantiv lätt kan suppleras efter den, brukar den ha relativ betydelse, däremot har den absolut betydelse, när denna suppling är omöjlig.

参 考 文 献

(特記のないかぎり発行地は Stockholm)

- Beite, Ann-Mari; Englund, Gertrud; Higelin, Siv; Hildeman, Nils-Gustav.
1984. *Basic Swedish Grammar*. Third edition.
Collinder, Björn. 1974. *Svensk språklära*. Lund.
Diderichsen, Paul. 1962. *Elementær dansk Grammatik*. 3. Udgave.
København.
Ivarsson, Martin. 1933. "Varför utlämnas adjektivets bestämda artikel?",
Nysvenska studier XIII, 189-220.
Jørgensen, Nils & Svensson, Jan. 1986. *Nusvensk grammatik*. Malmö.
Lindholm, Hans. 1981. *Svensk grammatik*. Lärobok i svenska som
främmande språk. Tredje upplagan. Lund.
Nylund-Brodda, Elizabeth & Holm, Britta (red.). 1974. *Deskriptiv
svensk grammatik*. 3:e tryckningen.
Thorell, Olof. 1977. *Svensk grammatik*. Andra upplagan.
Wessén, Elias. 1970. *Vårt svenska språk*. Andra upplagan.

辞 書

- Allén, Sture et al. 1986. *Svensk ordbok*. Utarbetad vid Språkdata,
Göteborgs universitet.
Johannisson, Ture & Ljunggren, K.G. (red.). 1970. *Svensk handordbok*.
Konstruktioner och fraseologi.
Molde, Bertil (red.). 1983. *Illustrerad svensk ordbok*. Femte
tryckningen.
Santesson, Rudolph et al. 1981. *Svensk-engelsk ordbok*. Andra
tryckningen.
Östergren, Olof. 1917-72. *Nusvensk ordbok*. Fembandsupplagan 1981.

例文テキスト

- Gripe, Maria. 1986. *Skuggornas barn*.
Nilsson, Ulf. 1986. *Det märkliga barnet*.
Svedelid, Olov. 1979. *Betong-Rosorna och bränderna*.